

はじめに

看護学の理解では、人は生物的、心理精神的、社会的存在であり、みなさんは今、これらの3側面をとらえることを学んでいると思います。人間は個体として“からだ”をもつ生物体であり、心があるものであり、そしてさらに社会で生きています。

人は個体であっても他の人とつながりを持ち、つながりをつくって生活しています。みなさんも身近な社会（集団）である家族とのつながりを持ち、近所の人々とのつながりを持ち、看護を学ぶ学生仲間や教職員、アルバイト先での仕事を通しての仲間などの他者とのつながりももっているでしょう。社会とは人と人とのつながりでつくられているものであり、また直接的なつながりはなくとも、人は社会の影響を受けます。このような、人の社会の中でのありようを理解するのが、社会的存在としての人の理解です。

看護を学ぶ中で、人の「生物」としての理解を深めるための生物学、解剖学、生理学、疾病の理解などの科目、こころのありようを学ぶ心理学などの科目があり、さまざまな教科書が出版されています。しかし、看護学生として“社会”とは何か、“日常生活”とは何かを学ぶ教科書は少ないです。

そこで本書は、“社会”とは何か、身近な“生活・日常性”とは何かを入り口として、社会のありようについて社会科学的な理解を深めるねらいで編集しました。3部構成で、全体は12章で構成されています。

最初に第1部にて、1章で「社会」、2章で「生活・生活者」とは何か、そして3章で「集団・組織」を解説しています。その後、「個人および集団における対立と協働」を解説する4章で、つながりの多様性を理解してもらいたいと思います。これらを踏まえ、第2部では5章で改めて「社会的な健康」と、健康行動等に関する理論やモデルなどを紹介する6章「科学からとらえた健康行動」を設定しました。そして最後に第3部にて、健康に影響を及ぼす「社会経済の変化」（7章）や「家族」（8章）、「地域社会」（9章）、「国際社会」（10章）、「情報社会」（11章）、そして「生命倫理」（12章）の諸側面を理解してもらいたいと思います。

本書が看護学を学ぶみなさんにとって、生活や社会に関心を深め、看護職としてどのような社会を実現させたいのかなどを考えるきっかけになれば幸いです。

編者を代表して 平野かよ子